

きっかけ

神奈川県立横須賀南高等学校二年（神奈川県）

長川 千歳

私は今年、人生で初めての文化祭を経験する。

文化祭は高校生活の中で特に楽しみとしていた行事であり、去年文化祭が中止だった分、私は今年の文化祭でお茶会をできる事が嬉しかった。

私は文化祭のお稽古に励み、たくさんお稽古を積み重ねていった。今でこそ私は部活動に対して熱心に取り組んでいるが、前は人より茶道への意欲がなかった。同級生や先輩と自分の実力の差を毎度感じていながらも、改善する努力が人一倍欠けていたと思っている。

茶道への意欲がない理由は、私の弱さにあった。

中学校の時、お世話になったある先生がいた。その先生は学校では数学の教師だったが、私生活では茶道をやっている、たまに聞く茶道の話が好きだった。それがきっかけで、私は茶道という世界に対して興味を持ち始めた。先生が持ってきた綺麗なお道具に感動し、毎日勉強の後に先生

に教えていただくお点前が不器用だがとても楽しかったのを覚えている。

しかし、茶道という世界は私の少しの興味だけでは厳しい世界だった。最初はただ知らない事を知る喜びを感じていたのに、だんだん厳しく決められた作法や所作が不器用な自分を否定しているようで辛く感じた。そうして間違いや失敗を重ねる度に、楽しいという気持ちは減ってしまっていた。

私は失敗を繰り返し、茶道への不安を感じたまま、高校へ進学した。私は中学校の先生から、

「高校に入ったら、茶道部に入るといいよ」と言われていたが、私は茶道部に入る事に罪悪感を感じていた。お点前も上手くできず、茶道が苦手になってしまった私が茶道部に入っていないのかという不安で入学当初は茶道部に入るのを拒んだ。実際、逃げるように他の部活動に入部したこともあった。

入学して数ヶ月後に茶道部に入部したが、入部した後もやはり周りより劣っていると感じる日々で、自分はやはり茶道に向いていないんだと思った。

ある日、中学校を訪問する機会があり、その時の先生に会った。先生は突然、後輩に私が点てたお茶を飲んでもらおうと提案をした。私は自分が点てたお茶なんて飲ませられないと思ったが、それでも断り切れずに久しぶりに先生

の前でお点前をした。私は自信がないまま後輩にお茶を点てた。不安で胸がいつぱいな中、

「美味しいです」。

という言葉を聞いた瞬間、その言葉を疑った。嬉しくてその言葉が私の中で自信になった。

私はずっと他人からの評価を気にしてお稽古をしていたせいで、茶道を始めた頃感じた感動や喜びを忘れていた。だからずっと不安が消えず、自分自身が本当にやりたい事を見失っていたのだと思う。私は、茶道を通じて先生のようなきっかけになりたかったのだ。

その日から、私は周りを恐れず自分と向き合うため、つまずきながらも茶道に一生懸命になっている。そして初めての文化祭、私は誰かのきっかけになりたいと願いながら意欲を持って部活動に参加する。